

11月22日に開催されたシンポジウム「次世代をはぐくむ、住まい・まちづくり」に参加された皆さんにアンケートへのご協力をお願いしました。記入いただきましたご感想やご質問の内容(講演者別と全体)と、講演者からのコメントを報告します。

(同内容のご意見・ご感想はまとめて掲載しています。)

事例報告3: 西川日奈子(NPO法人西淀川子どもセンター代表理事)

以下、アンケート回答より感想を掲載します。

○私が在住している自治会で、つい先日の役員会で集会所の開放日を設定し、地域の老人の見守り事業としての活動を提案。当自治会では子供は10名もいなくてほぼ完全に老人住宅化している。(65才以上の高齢者が80%に達している)(50歳代)

○空室の活用はひとつのヒント(60歳代)

(西川)子どもたちの出入りがご迷惑にならないよう、できるだけ気をつけています。わたしたちの事務局が入居させていただいている棟も、同様に、班長のなり手がなくて今年度、まだ2年目のわたしが班長さんに指名されました。それぞれの方と知りあいながら、何かお役にたてればと思います。自治会長さんや団地役員さんなど、まずつないでくださる近くの方の存在を大事に思っています。

○子供の頃、ぼびんず程ではないですが、親以外の大人と接する場所、機会が多かったのですが、それをNPOという形で設けなければいけないことを改めて考えさせられます。(40歳代)

○日本の今後を考えた共通のビジョンが今の日本には無いのかも知れませんが、日本全体の地道な官民あわせた啓もう活動が必要ですね。“スゴイ”頑張ってください。素晴らしいです。(40歳代)

○「○○ちゃん、遊ぼう！」昔、私たちが子供時代の頃、忘れられない響きです。そういうコミュニケーションが見られない今、地域が子供たちを支えるということ、貴重な取り組みだと思います。(50歳代)

○最初のNPO法人を設立を少しだけ説明が聞きたかった。(何を体験されて子供支援を・・・例話でもよかったです)時たま(教育指導者、保育園、幼稚園、学校教師)先生が見られる時が有りますか?(現場)(60歳代)

(西川)大人がはりめぐらせた個人情報保護の壁は、子どもたちの生活を真に守っているとは思えません。長年(15年目)子どもたちの暴力防止ワークショップ(CAP)を重ね、また地域保護司(11年目)の立場からも「子どもの周辺の大人が子どもの気持ちに寄り添える場と人が増えない」状況が気がかりで、大人はどんどん子どもたちから遠ざかっているのではと危機感をもち、まずは取り急ぎ自分が地域の子どもの声の受け皿の一つを作ってみようと、3年前にささやかな決心をしたのが、NPO法人西淀川子どもセンターの始まりです。子ども会、PTA、はぐみネット、民生委員さん、区の子育て支援連絡会議なども連携しています。

○私もネイルサロンという切り口が興味深かったです。「間口を広げる」というのは意外にむずかしいです。(40歳代)

(西川)ちなみに、当日一番着目されたのが、借りている団地の1室で毎月1度午前中に、高齢者(わたしが子どもの頃の「おっちゃんおばちゃんたち」)に向けてネイルケアサロンを行っていることだったようでした(後日新聞取材も受けました)。高齢者の方々は、現在も地域の情報をたくさん持っており、つながる力も大きく、わたしたちの活動を知り自分なりに関心を持ってくださると、あちこちに声をかけて、地域の子どもたちや親御さんを、わたしたちの場へとつないでくださったり折々に助けていただいています。戦争中を生き抜いてきた世代のパワーを尊敬し、「なんぞのときのよっしゃ」を深めていこうと思っている今日この頃です。

○心開いて、つながっていきこう:「愛情は生きるの力！」(50歳代)

(西川)はい。一人でできることはあまりにも少なく、人がつながるためには、「志」と「場」が必要です。「どんなことがあっても自分の人生をあきらめなくていい」と、心開いて言いつづける大人たちが増えますように。

○先日堀川幼稚園に来て下さいましてありがとうございます。モヤモヤ悩みながら生きていて、その答えがみつからなかったのですが、「あ、なーんだ」と自分の中で答えが出そうなものもありました。西川さんの言葉はおいしいケーキ以上の甘くてやさしい満足感です。(40歳代)

(西川)会場へ来て下さっていたことに気づかず、すみません。「あ、なーんだ」は大切ですよ。うれしいです。

○今の子供達ってそんなに悩みばかりかかえているのかなあって感じ。昨年度高校に通ったんですけど自分が高校生の頃とあまりかわらなかつたです。大人が今の子は何も出来ないって思いすぎじゃないですか。基本的にかわらないと思います。子

供の方がしっかり見すえてると思う。(30歳代)

(西川) そうなんです。子どものパワーは変わりません。周囲の環境と関係性が、変わりすぎました。

○子どもを育てるといことは、今や地域、社会全体の問題となっているなど改めて感じた。こういうところから少しずつでも良い方向になればと思います。(30歳代)

(西川) かつては、それなりに「おたがいさま」で過ごせていたり、気軽なおせっかい関係を、物理的・心情的に失ってしまったことを自覚しなければと思います。子どもを一人の住民として主体的に捉えた街づくり施策も願っています。少しでも良い方向に！

○学校が役所化しているという現代の中では大切な取組みと感じました。まぼろしの子ども像を求めすぎていたという反省。(50歳代)

(西川) 学校の役所化、ほんまに同感です。なんでやろ、と思います。先生方もいっしょに応援したいです。

西川日奈子よりコメント

先日は、住まいの情報センターという、一般概念上「子ども支援活動」との結びつきがまだ強くない場で話す機会をいただき、しかも、多様な講師の先生方ともご一緒させていただき、貴重な出会いと体験に深く感謝しています。地域に根ざす活動が、その枠を超えた支援を得ることも、今後の大事な方向性と実感しています。そして、会場の皆さまからのアンケートのご意見や励ましを、たくさんありがとうございました。

子どもの本質やその願いは昔も今も変わらず、パワフルです。しかし、経済格差の深刻さと同時に、都会のオートロックの建物とオートロックの学校を、通学路を見守られながら往復している子どもが増えている現代、子ども自身が見聞きしたり感じたりすることは、大きく変わってきています。人生を語り合い共感しあう大人同士の関係性がどんどんうすれ、塾や習い事の過剰な選択肢と比較のなかで、親に気をつかいながら過ごしている子、一方ではケアをしてくれない未熟な親と暮らす子、日常のトラブル凹んでしまっても誰にも気づいてもらえずそれっきりになっている子、親の離婚等に悩む子などが、あちこちにいます。消費社会は子どもたちをターゲットに戦略をはりめぐらせ、子どもが犯罪や虐待の被害にあう実情も、密室化でわかりにくく、携帯やパソコンの問題も広範囲になっています。

子ども支援に一人でも多くのサポーターをつなぎつなげて、大人たち自身も希望を感じるような、自然なぬくもりのオーラ(?!)を、子どもたちがキャッチしてくれるように、出会う子どもたちの本来の力を信じて努力していきたいと思っています。

各地に子ども支援が根づきますよう、今後どうぞよろしくお願いいたします。